第６９号　　平成２６年　７月１１日　　発行：泉南市介護者（家族）の会

介護者だより　きずな

事務局：泉南市社会福祉協議会　℡４８２－１０２７　泉南市樽井１丁目８－４７

第十九回総会

四月十一日（金）あいぴあ泉南大会議室で、十九回総会が開かれ、向井市長、社会福祉協議会・山下会長、梅田局長はじめ、近隣の介護者（家族）の会の皆さんや、施設の職員さん、市民の方など、約七十人の方が来てくれました。

昨年は料理教室、食事会、ミニ旅行、お花見と、みんなでいっしょに食べる機会が多い年でした。また、男の介護「味彩の会」も十一回開催され、こちらの会でも昼食付きが慣例となりました。

介護者（家族）の会も十九年目を迎え、一人暮らしになった会員が増えてきました。介護中の会員は九人で、そのうち在宅で介護されている方は三人だけです。介護する側だった会員も、介護される側へと移りつつあります。今の体力・気力を維持しながら、老後の生活を楽しみたいものです。

泉南市では、昨年も認知症のサポーター養成講座、研修会が積極的に開催されており、会員の中では講師役として参加している人もいます。

今年度は役員改選の年でしたが、前年度の役員が続投することになりました。

それから、これまで六月と十一月は、古谷義信先生の絵手紙教室が開かれていましたが、今年度は田尻町、ふれ愛センターでのニコニコ会(介護者家族の会)に参加させてもらうことになりました。

第二部は岩崎順子さんの「認知症の向こう側にある心」～おじいちゃんから孫に見せてくれたもの～の講演会です。

イラスト
岩崎順子

家族介護の日仏比較

7月13日～19日まで、横浜で世界社会学会　横浜大会が開催されます。その大会での発表のため、杉田先生が来日され、その帰路、泉南市で報告会を開いてくれます。

内容は、フランスと日本での、公的支援政策と家族会の成り立ちの違い

介護者の仕事は、正社員、パート、アルバイト、自営業なのか、離職を選ぶのか？

1人の人が何年くらい介護しているのか？

これらが、フランスと日本、また男性と女性でどう違うのか？　　などです。

日時　7月22日（火）午後1時半～3時半　　会場　あいぴあ泉南　3階研修室1

講師　杉田　くるみ　先生　フランス国立科学研究センター　研究員

マダム　オーレリー・ダマム　パリ第8大学　社会学部准教授

☞ 報告会の後、　杉田先生、　マダム・ダマムを囲んで交流会をします。時間のある方は、こちらにもどうぞご参加下さい。

認知症の向こう側にある心

岩崎順子さんのお話

私の夫は、早くにガンで亡くなりました。夫の父も、夫が亡くなった翌年、肺ガンになりました。夫には姉が一人いたのですが、その姉も大阪の街で二十才の一番かわいい頃に、死んでしまいました。

夫は北海道の小樽の出身です。今はその家に義母一人が住んでいますが、子供を二人とも亡くしてしまうという悲しい経験をしています。私も親になって思うのですが、自分が病気になるよりも、子供に先立たれるというくらい、辛いことはないのではないかと思います。

夫が亡くなってから、私にできることは何だろうかと、考えました。私には三人の子供がいますが、その子供達をおじいちゃん、おばあちゃんの所へ会いに行かせることが、私のできることではないかと思いました。夫が亡くなった時、上の子供は小学校五年生、中の子供は二年生、下の子は保育所でした。

中の子供・漁次が高校生の時、「おじいちゃんに会いに行ってくるわ」と言って友達と出かけました。その頃、義父は認知症がかなり進んでいました。

元気な頃は車に乗っていたのですが、車も廃車しました。ところが、スーパーなどで、自分の車と同じ型の車をみつけると、「これは俺の車だ！」と言ってけんかになったり、また、夜中に出かけて行って、警察の人に連れてきてもらったことも、何度もありました。それから、夜トイレに行きたいと言って、トイレにまでは行くのですが、そこで座り込んでしまって、義母は体重もある義父をベッドに移すこともできず、朝まで、ガウンを羽織って廊下で過ごしたこともありました。

義父が認知症になった時、義母は「なんで、なんで。なんで、こんなこともできないの？これくらいのこと、覚えてないの？」と、ずっと思っていたと言っていました。

私も自分の夫がガンになった時、「なんで！」と思いました。ただ、認知症とガンと違うところは、私も夫もガンを治そういう方向に向かっていたことです。

義母は、以前の、頭も回って、何でもできたお父さんに戻ってほしいと、世話をしながら願っていました。でも、長い月日が流れて、亡くなる少し前には、今ここにいる、何も解らなくなって、尿ももらしてしまうお父さんが、今のお父さんなんだなと、気がついたと話してくれました。ありのままを認めてあげないと、この人だってしんどかったんだ。それからは、「まあ、いいか」と思うようになれた。それを気づかせてくれたのは、子供達だった、と。

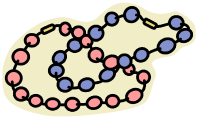
話は戻りますが、漁次が小樽へ行った時、おじいちゃんの認知症はかなり進んでいました。私が結婚したした時は、千歳空港まで車で迎えに来てくれたおじいちゃんですが、だんだんと足が弱り腰も曲がって、小樽駅までも来ることができなくなってきました。それでも、私が子供たちを連れて遊びに行くと、二階の窓から「あ～、お前達

来たんだなあ、大きくなったなあ」と、手を振って出迎えてくれていました。

そんなおじいちゃんでしたが、今回漁次が行った時、二階の窓におじいちゃんの姿はありません。それで、玄関を開けて「おじいちゃん、漁次来たで」と言うと、おじいちゃんが奥から出てきて「お前は誰だ！」と怒鳴られました。「おじいちゃん、漁次や、孫の漁次や」と言ったけど、「お前なんか知らない」と怒って奥へ入ってしまいました。しばらくして出てきて「思い出したぞ、お前は圭介（亡くなった漁次の父）だな」と、言いました。息子の死んだことも解らなくなったかと思うと、寂しかったと漁次は話していました。

その夜、漁次達はおばあちゃんと三人で二階の台所でお茶を飲んでいました。おじいちゃんは一階で寝ていました。すると、一階で大きな物音がするので「またおじいちゃん、何かやらかしたんだな」とおばあちゃんは階段を下りていきました。そうしたら、紙おむつだけを付けたおじいちゃんがいました。

部屋の中には漁次達の荷物が、お店屋さんごっこをするように並べられていました。おじいちゃんはと見ると、右は黒、左は水色の靴下をはいています。「おじいちゃん、それ、僕の靴下や」と言おうとして、漁次はびっくりしました。おじいちゃんは、首にネックレスをしています。



「あっ、そのネックレス、彼女とペアでしようと、昼間、小樽運河で買ってきた物や」と、友達のケイ君。「おじいちゃん、最近おしゃれになったんか、ネックレスなんかして」と、漁次が笑って言うと、「おじいちゃんとペアでネックレスか」とケイ君も笑いで返してくれたそうです。

私はその話を聞いて、ちょっと安心しました。高校生くらいは反抗期の最中です。バイトして貯めたお金で買った彼女へのネックレス、それを紙おむつ姿のおじいちゃんが首に付けている。汚いと思っても当然なのに、笑いですましてくれた。二人ともやさしい子だなあと思って・・・

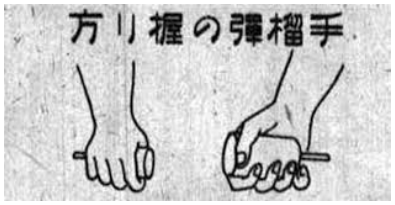
そして、夜中のことです。隣の部屋で寝ていたおじいちゃんが「朝だ、起きろ、起きろ」と大声を上げ始めました。「寝よう」と言っても、しずまりません。漁次はその時、和歌山のひいおばあちゃんのことを思い出したそうです。ひいおばあちゃんも「おじいちゃんにお嫁さんが来て、追い出される」とか「貯金通帳が無くなった」と言って泣いていたことがあったなあと。それから「おじいちゃん、朝や。朝やけど寝よう」と言ってベッドに寝かせ、赤ん坊をあやすように背中をたたいたそうです。そのうちおじいちゃんは、いびきをかき始めました。その様子に漁次は「なんか、むちゃくちゃじーんときてしまった」と、話していました。

私は

「漁次、おじいちゃんは漁次の小さい時、小樽の水族館へ連れて行ってくれたなあ。そこには大きなトドがいて、漁次は怪獣みたいやと喜んでいたなあ。それから、毎年おじいちゃんは、水族館へ連れて行ってくれるようになったんだよ。その頃のおじいちゃんは、しゃんとして、漁次よりも大きかったけど、今は背中も丸く小さくなって、漁次の方が大きくなったな

あ」と、話しました。
　今は、認知症になってしまったけれど、こんなおじいちゃんにも、赤ちゃんの時があり、お母さんにだっこしてもらい、食べさせてもらっていた時があった。バリバリ働いていた時代もあった。認知症になると、性格が変わったようにみえるけれども、世話をかけてすまないと思っている心があり、その姿の向こうには、昔と変わらない心が残っています。

　義父は、十代の頃、沖縄へ戦争に行きました。終戦を迎えた時、アメリカ兵に追い詰められて、ガマという洞窟に逃げ込みました。追ってきたアメリカ兵は「出てこい、出てこい。出てこないと、爆弾投げるぞ」と言いました。けれど、その当時の若者は、アメリカ兵に捕まったら、戦車に引きずり回されて無茶苦茶にされる、女の人は裸にされて犯されるという教育を受けていました。捕虜になる前に死ねと、手りゅう弾を渡されていました。



　リーダーが「天皇陛下万歳」と言って手りゅう弾のひもを引きました。
　そのとたん、辺り一面に血と肉の塊が飛び散りました。それを見た義父達は、手や足の震えがとまらなくなったと言います。それでも、死ななくてはいけないと、手りゅう弾に手をかけるのですが、引くことができません。その時、国のお父さんお母さん、兄弟のことが思い出されました。そうして、殺されるのを覚悟で、震える体で両手を上げ、アメリカ兵の前へ出ていきました。
　戦争も辛かったが、生きて帰ってきたら「皆、お国のために死んだのに、岩崎は帰ってきたのか。お前なんか非国民だ」と石を投げられ、この方が地獄だったと言っていました。
　戦後、義父は沖縄へ行きました。ひめゆりの塔の前で涙を流してそこから動かなかったそうです。（同じ仲間が死んだのに、自分は生きて帰ってきてしまった・・・）そして、もう一回沖縄に行きたいと言っていました。でも、それは叶いませんでした。

　私は義父の代りに、沖縄に行ってきました。夫と義父の写真を持って。そして、ひめゆりの塔へ行って、ひめゆり部隊だったという女性から、話しを聞かせてもらいました。その人は「これ、何か解りますか」と後ろの洞窟の中を指さしました。
「棚ですか」
「違います。ベッドなんです。ここに傷ついた兵隊さんが何人も運ばれてきたんです。物のように、ひとつのベッドに何人もの兵隊さんが置かれていました。電気がないから、私達はろうそくに火を灯して兵隊さんのお世話をしました。
　二百人くらいの兵隊さんが運ばれてきましたが、最後、ひめゆり学徒は二～三人しかいませんでした。兵隊さんの傷口からは、うじがわいていました。私達は、ピンセットがないから、木の枝をピンセット代わりにして、うじをひとつひとつ取っていきました。手や足にうじがわくのは、まだいいんです。耳の中にうじがわいた兵隊さんは、ほんとに辛そうでした。
　兵隊さん達は、ポケットから写真を出して『これ、わしの嫁さんや』『これは、母親や』『子供や、見てくれ』と言って、見せてくれました。そうして亡くなられました。私達は『天皇陛

下万歳！』と言って死ぬようにと教育を受けていました。が、そう言って死んだ兵隊さんは一人もいません。みんな、『お母さん！』と言って死んでいきました」

亡くなられた方のお体はもう、ありません。けれども、その人を思い出すことで、皆さん方の生きる力になり、生きる知恵になると私は確信しています。

義母も、「私が雪の日も雨の日も毎日病院へ行けたのは、圭介と娘が両側から支えてくれていたからだ」と、話していました。

私は夫が亡くなるまで「自分は生きている」と思っていましたが、生きているのではない、「生かされている」のだと、気づきました。大いなるもの（神様）がおりてきて息を止めるまで、人は生かされているのだと。認知症になっても、その人が生きることには、意味があるのだと。

最後に「浜辺の歌」を聞いてもらいます。この歌を聞きながら、皆さん方の大切な人を思い出して下さい。そして、その方と心の中でお話して下さい。

♪あした
浜辺をさまよえば
むかしのことぞ
しのばれる

この時、会場の中からは、あちらこちらで、すすり泣きが聞こえてきました。きっとなつかしい人と出会えたのでしょう。

おじいちゃんが孫達に残してくれた事、本当に心うたれる講演、ありがとうございました。

看取り後の私ですが、今日は主人の事をいっぱいいっぱい想い出させて頂き、優しい涙となりました。

すばらしい人間関係（おじいちゃんとお孫さんとの）の話を、涙とともにお聞きしました。これからの私の人生の参考にしたく思います。

障害を持つ娘として、母の介護をして十何年か過ごしました。今、自分が重い障害をひきずり、大きな手術を終えて、介護される立場になった時に、される側より、する側の方がどんなに良いかを痛感しています。

最後の前日に見せてくれた、気難しいしい母の、ほどけた、笑顔を思い出しました。

娘程の順子さんに教えて頂きました。　北川　睦美

きゅうりのいため漬け

◊◊材料
きゅうり　六本
赤トウガラシ　一本
生姜　一片

◊◊調味料
砂糖　大さじ四
酢　大さじ四
醤油　大さじ二
塩　小さじ半分
ゴマ油　大さじ一

◊◊作り方
キュウリは縦にして四つに切る。それを四つ割りにして拍子木のように切る。

赤トウガラシは半分に切り、種をとっておく。

生姜は千切りにする。

フライパンを熱し、ゴマ油を入れ、赤トウガラシと生姜をいため、きゅうりを入れて、さっといためる。そこへ、合せておいた調味料をからめる。

冷蔵庫で一週間くらい保存できる。（甘めです）

六月のつどい

◎北川さんは、かがんだ時、背中がポキッと音がしたんだって。病院へ行ったら、背骨を固定していた金具が折れていたんですって。
☆まあ、手術して、まだ二年なのに！
◎それで、すぐに獨協大学の種市先生に連絡がいって、栃木まで手術をしにいったんですって！
◇早く元気になって、帰って来てほしいわね。
⊙冨本さんのご主人も、庭木の剪定をしようとして、脚立から落ち、門扉を飛び越して、道路に投げ出されたそうよ。
☖それは大変だ！
⊙ところが、偶然近所の人が散歩で通りかかり、すぐに救急車を呼んでくれたの。それから、近くの人に声をかけて、みんなで介抱したそうなの。
♋冨本さんはいなかったの？
⊙家の中にいたんだけれど、ピンポンが聞こえなかったみたい。出てきた時はもう救急車が到着していたんだって。
❀まあ、早くにみつけてくれた人がいて、良かったこと。
⊙でもね、冨本さんは、みんなといっしょに病院へ行ったんだけど、その間のこと、全然覚えてないんだって。
❀思いがけないことが起こると、気が動転して何も解らなくなることもあるわよ。
⊙冨本さんは、ご近所のおかげで、主人は命拾いした、と感謝していたわ。それに皆さん、その日は病院に夜遅くまでついていてくれたんだそうです。
▽知り合いのお祖母さんが、最近おしゃれになったの。きれいな洋服を仕立てて、化粧をして、それで、元気にならはった。
○うちの近所の奥さんも、パーキンソン病なんだけれど、出かけるのが好きで、布草履教室にも、健康体操にも来て、元気そうよ。もっとも、ご主人が家事を手伝ってくれるからなんだけれど・・・
□私は一人で寂しい。でも、虹のデイサービスで、作品作りに没頭している時、幸せだと思える。若い時は元気で良かったけれど、でも、その頃は子供のこと、親のことで苦労も多かった。最近今が幸せだと思うようになれた。

つ　ど　い

９月１２日（金）
午後１時３０分～
あいぴあ泉南　２階会議室２

チョコボラ会

９月 26 日（金）
午後１時３０分～
おいでや！泉南

男の介護「味彩の会」

８月１日（金）　９月３日（金）
午前１１時～
平野台の湯

編集後記

あれは私が五歳くらいの頃だったと思う。夜中目覚めると、脅えたような母の声が聞こえてきた。「トシアキが戦争にとられへんやろか」トシアキ（兄）は中学生だった。

私は息子が戦争にとられると思ったことはない。平和憲法がある。だけど、それは違っていた。私が戦争を知らずに生きてこられたのは、「戦争なんて二度とごめんだ！」という親達の痛恨の思いが、戦争への道を回避させてきたのだ。

集団的自衛権容認のニュースを聞いて、六十年前の母の声を思い出す。介護保険の改正？も気になるが、それは次号で。（け）

お　別　れ

西村ステノさん
５月９日　　85 才
さいごの言葉がありがとう・・・